
共同研究の経過と概要

展示型基盤研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」

村木二郎

本研究報告書は、2010年度から2012年度にかけて実施された国立歴史民俗博物館共同研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」の成果をまとめたものである。

1. 目的と方法

職人技とも呼ばれる日本の伝統技術は、中世に大きく花開いた。海外へ輸出される貿易品目にも工芸品が名を連ね、銅鏡のように中国や朝鮮半島で日本製品のコピーが作られるまでに至る。そういった技術を支えた職人たちの具体的な姿が、次第に明らかになりつつある。新潟県新発田市北沢遺跡では、陶器窯と製鉄炉、炭焼窯、柚場遺構が一緒に見つかっている。茨城県東海村の村松白根遺跡は大規模な製塩遺跡であるが、遺物から骨細工や鋳物師の存在も知られ、複合的な生産状況が窺える。また、博多や京都、鎌倉などの都市部のほか、港や宿でも生産関連の遺跡や遺物が多数発見され、その蓄積は膨大なものである。さらに、大分市豊後府内遺跡や長崎の遺跡群からは、「キリシタン関連遺物」を中心に海外の技術が多数見受けられる。外来技術が果たしたインパクトとその受容の経過は、技術の転換をリアルに示してくれる。しかし、こういった事例は個別に検討されてきたものの、なかなか全体像を把握するまでには至っていない。そこで、いくつかのテーマにそって整理をし、研究を進めることとした。

まず、「時代を作った技術」として、巨大石塔造立、鎌倉大仏鋳造、安土城築城など時代のモニュメントが示す技術の集約を考える。鉄砲のように最先端技術がすぐに反映される道具や、技術の粋を集めた美術工芸品、外来技術もその対象となる。これらは時代のエネルギーの結晶であり、それぞれから技術の到達点を明らかにする。

次に、「日常生活を変えた技術」として、焼物、漆器、木製品、石製品やそれらを加工する道具についての基礎的な研究をおこなう。古代以降の技術転換によって道具が普遍化し、中世の生活変化をもたらした。また日常生活道具ゆえに、それらの生産も消費者の動向を直接反映してさらに変化してゆく。陶器が一般消費者に浸透すると、いかに安くて大量に生産するか工夫を重ね、窯の構造が大きく革新した。同様のことは石臼にもいえそうで、河原の転石を利用して簡便に仕上げるものが登場する。その分、製品が粗悪化するため、道具の差別化も進んだと考えられる。

また、「技術を担った人々」として、町、村、海山の生産状況を具体的に検証し、技術者集団と権力の関係にまで踏み込んで考える。技術者の背後にある権力のあり方もまた、中世の特徴である。寺院から武家権力への権力交替、自立した職人の存在など、新たな遺跡の発見を踏まえて従来の文献史学との協業を具体的に大いに更新することも可能である。

以上のように、文献・考古・民俗・美術・分析化学などの多視点からの検討を重ね、新しい中世の技術史像を描く。そして、それらの成果を展示で公開することとした。

2. 研究組織

館外と館内に分け、それぞれ五十音順で示した（所属は最終年度、◎は研究代表者、○は研究副代表者）。

[共同研究員・館外]

- | | |
|-------|---------------------|
| 大澤 研一 | 大阪歴史博物館・学芸員 |
| 小野 正敏 | 人間文化研究機構本部・理事 |
| 川口 洋平 | 長崎県世界遺産推進室・係長 |
| 栗木 崇 | 熱海市教育委員会・学芸員 |
| 佐伯 弘次 | 九州大学大学院・教授 |
| 佐々木健策 | 小田原市文化課・主査 |
| 鈴木 康之 | 広島県立歴史博物館・主任学芸員 |
| 関 周一 | つくば国際大学産業社会学部・非常勤講師 |
| 坪根 伸也 | 大分市教育委員会・係長 |
| 中島 圭一 | 慶応義塾大学文学部・教授 |
| 福島 金治 | 愛知学院大学文学部・教授 |
| 四柳 嘉章 | 石川県輪島漆芸美術館・館長 |

[共同研究員・館内]

- | | |
|--------|---------------------|
| 齋藤 努 | 本館・研究部・教授 |
| 高橋 一樹 | 本館・研究部・准教授（～2011年度） |
| 仁藤 敦史 | 本館・研究部・教授 |
| 日高 薫 | 本館・研究部・教授 |
| ○松田 陸彦 | 本館・研究部・助教 |
| ◎村木 二郎 | 本館・研究部・准教授 |

[研究協力者]

- | | |
|-------|----------------|
| 池谷 初恵 | 伊豆の国市教育委員会・学芸員 |
|-------|----------------|

3. 研究の経過

〈2010年度〉

【研究会・調査】

第1回研究会（6月19・20日 国立歴史民俗博物館）

第1回研究会として、共同研究員全員による研究計画の報告

個別研究報告：齋藤 努「金めっきの技法について」

第2回研究会（8月10・11日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：村木二郎「職人図の読み解き―「職人尽絵」を使って」

個別現地調査（9月30日 小田原）

石切図屏風・石引図屏風の調査

第3回研究会および現地調査（12月3～5日 広島県立歴史博物館ほか）

沼田荘の現地調査および、出土遺物調査

個別研究報告：鈴木康之「草戸千軒町遺跡の近年における研究成果」

：鈴木康之「草戸千軒町遺跡出土井戸材にみる木材加工技術」

：下津間康夫「草戸千軒町遺跡出土漆器の編年」

：四柳嘉章「草戸千軒町遺跡出土漆器の特質」

草戸千軒町遺跡出土遺物の調査

第4回研究会および現地調査（2月11～13日 諫早市郷土館・松浦史料博物館ほか）

雲仙市神代小路・神代城跡巡見，諫早市沖城跡出土遺物の調査

個別研究報告：佐伯弘次「中世の大島氏と的大山大島」

大山大島の中世遺跡巡見，松浦史料館所蔵「絹本着色松浦義像」「渡来上着」調査

【成果】

共同研究を開催するにあたり、これまでの研究成果をわかりやすくまとめておく必要があった。そこで、総合誌『歴博』160号を「特集 中世の生産技術」とし、共同研究員6名が以下の稿を執筆した。

小野正敏「生産遺跡から中世をみる」

佐伯弘次「寧波と博多の文物・技術の交流」

大澤研一「モノづくり都市 中世の堺」

坪根伸也「外来技術としての鍵と錠」

村木二郎「技術革新の熱意」（コラム）

鈴木康之「結物の普及と木材加工技術」（コラム）

研究会では、各自の計画を報告したため、論点が集約され問題意識も高じ、これまで見逃されていた外来技術の遺物を発見することもできた。また、館蔵資料をリスト化するなかで、展示につながる多くの資料を見出した。

また、博多および豊後府内出土のキリシタンや生産関連の資料を製作した。これらは本研究が目指す企画展示だけでなく、総合展示にも活用できる資料群である。

〈2011年度〉

【研究会・調査】

第1回研究会（5月14・15日 国立歴史民俗博物館）

全員報告：展示に関連した研究計画

個別研究報告：藤原重雄「絵画資料と技術」

第2回研究会および現地調査（6月3～5日 平泉・一関）

平泉町教育委員会・岩手県教育委員会所蔵資料調査

柳之御所遺跡・白鳥館遺跡・骨寺村荘園遺跡の現地調査

第3回研究会および現地調査（8月7～9日 新潟）

新発田市教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟市文化財センター所蔵資料調査

奥山荘の現地調査および、出土遺物調査

第4回研究会および現地調査（10月8～10日 能登）

石川県輪島漆芸美術館所蔵資料調査

能登の中世遺跡現地調査

第5回研究会（12月22・23日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：栗木 崇「鎌倉大仏の礎石について」

佐々木健策「泡沫的社会状況による技術の移入と展開」

松田陸彦「近現代の花崗岩採石用具とその技術」

小野正敏「戦国期の膨張する消費を支えた越前焼生産」

川口洋平「東南アジア陶磁と黒漆，そして吹きガラス—南蛮貿易をめぐって—」

高橋一樹「中世の稲作技術について」

村木二郎「中世前半における銅細工—京都七条町・八条院町の検討—」

藤原重雄「金光寺所蔵『仏説目連救母経』紙背の夢想を注進する起請文—泊浦・道智上人周辺の夢語り—」

佐伯弘次「海外技術の移入—瓦・薩摩塔・梅園石—」

関 周一「中世の技術に関する史料—漆と渡来職人—」

福島金治「中世前期の寒冷気候と在りでの産業拡大」

第6回研究会（2月11・12日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：中島圭一「商品流通から技術の転換を考える—文献史料は十五世紀生産革命論の夢を見るか—」

大澤研一「寺院と技術・職人—展示に向けて—」

高木徳郎「中世前期の林業と村落」

齋藤 努「金属の製錬・加工技術について」

鈴木康之「中国地方における中世の鉄生産と流通」

池谷初恵「東国における中世初頭瓦の様相—文様と製作技術の系譜から—」

藤澤良祐「戦国期の膨張する消費を支えた施釉陶器生産」

坂井秀弥「中世越後平野における低湿地遺跡—新潟市馬場屋敷遺跡検討会の報告—」

大庭康時「博多遺跡群出土の生産関係遺物と遺構」

坪根伸也「生産関連遺物と外来技術の導入—豊後府内出土遺物からの検討—」

仁藤敦史「古代国家における技術者の雇用形態」

住吉朋彦「歴博の五山版に見る版木のかたち—越前版の遺例6片を参考に—」

井上美奈子「中世を終わらせた化粧文化—「小町紅」が出来るまで—」

金沢 陽「高麗と元の螺鈿技術—国を越える技術の複合—」

日高 薫「南蛮漆器の調査研究—現状と課題—」

【成果】

今年度から、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「「中世」を作った技術—生産からみる時代史」2011～2013年度(研究代表者 村木二郎)および、科学研究費基盤研究(B)「中世を終わらせた「生産革命」—量産化技術の広がりと影響—」2011～2012年度(研究代表者 中島圭一)と研究会・調査を共同で実施することとしたため、研究報告者には本共同研究員以外も含まれるようになり、より幅の深い議論がおこなえるようになった。

平泉・新潟および能登の漆器生産に関して現地の遺跡等を見学しながら資料調査をおこなった。これらは企画展示においていくつかのコーナーを構成する重要な要素であり、資料見学に際しては展示を見据えて資料選定までできたものもある。研究会では、メンバー全員が報告をおこなうことで、現在抱えている問題が明確化され、来年度の視点を絞ることができた。

また、博多遺跡群出土のガラス生産関連の資料等を製作した。これらは本研究が目指す企画展示だけでなく、総合展示にも活用できる資料群である。

〈2012年度〉

【研究会・調査】

第1回研究会(4月21・22日 国立歴史民俗博物館)

個別研究報告：松田陸彦・栗木崇「矢穴痕跡の解釈—考古学と民俗学的手法から—」

福島金治「神奈川県津久井市光明寺所蔵「善宝寺地絵図」と職人」

川口洋平「長崎の町屋と川原慶賀の絵画資料「諸職と道具」について」

第2回研究会・調査(6月2～4日 広島・島根)

北広島町矢栗製鉄遺跡・同坤東製鉄遺跡・鉄の歴史博物館・菅谷たたら・和鋼博物館見学
島根県埋蔵文化財センターにて出土遺物見学

第3回研究会・調査(8月2～5日 徳島)

徳島県立博物館・徳島県埋蔵文化財センターにて出土遺物見学

徳島市川西遺跡・海陽町立博物館・鞆浦・椿泊・一宮城跡・万年山墓所・各所石塔・藍住町

勝瑞遺跡・藍の館見学

第4回研究会（9月15～16日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：佐々木健策「石臼研究の現状と課題」

鈴木康之「草戸千軒に見る生活の諸相」

齋藤 努「日本刀の刀身製作に使われる技術」

小野正敏「一乗谷コーナー」

大庭康時「博多遺跡群出土資料に見る中世のガラス技術」

村木二郎「美術工芸と八条院町」

第5回研究会（12月15～16日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：池谷初恵「中世を終わらせた城郭瓦一聚楽第・伏見城の金箔瓦を中心に」

川口洋平「外来技術コーナー展示構成案「海を越えた技術・材料・意匠」

関 周一「鉄砲の製造技術の伝来」

福島金治「「寺社と職人」展示案」

日高 薫「南蛮漆器コーナーについて」

住吉朋彦「渡来刻工の活動」

【成果】

中国山地の製鉄遺跡調査では、近世たたら技術が中世段階で準備されていたことを明確に印象付けられた。これは中世の鉄生産技術の変革を捉える上で大変重要な成果であり、全体調査であったことから、メンバー全体での共通認識となった。これにより、企画展示での構成要素としても製鉄コーナーは不可欠と位置付け、再構成を迫られた。

生産と流通に関する中世阿波の調査では、流通拠点としての川西遺跡の出土資料を調査することで、イメージが大きく膨らんだ。従来、仏具鋳型の出土から特殊な製品製作に目が行きがちであったが、今回、全体調査で多視点から観察することにより、材木の鼻線部分が切断されて捨てられていたものを発見した。流通過程での生産、加工の様相が、より具体的にわかってきたといえよう。

個別調査としては、石丁場における石割り技術が、特殊な職人技から大量切り出しのための一般的な技術へと変化しているのではという仮説のもとで、その証明方法を検討した。矢穴の痕跡の測定方法を工夫することで目処が立った。今後この手法をより簡便化することで、データ量も増やせそうである。

南蛮漆器の製作背景については、京都市内の近世初頭の真鍮工房遺跡から、輸入漆を入れたタイやベトナムの陶器が出土しており、大きなヒントを得た。また、西洋型の鍵が長崎、有田、杵築、高知などで見つかったことがわかった。これらの外来技術、材料、意匠が中世の技術と融合することで製品が作られていった様子が見えてきた。

4. 共同研究の成果

本共同研究は、展示型共同研究であり、また、2年目以降は科研費と連動した科研型共同研究でもある。研究成果の発表の場を平成25年度企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」に位置付けており、全体を通じて展示にあわせたテーマ設定のもと、調査・研究を進めた。ただし、3年間の研究のなかで新たに現れたテーマももちろんあり、結果的に当初の構想と着地点との間にある程度のずれは生じている。

生産技術の中でも、中世の日常生活を変えた、あるいは支えた技術がある。漆器や鉄鍋の普及はその最たるもので、中世の前半に変革があったと考えられる。漆器に関しては、下地に柿渋を用い、上塗りは1回程度の薄いものとした簡便なタイプが12世紀代から見られる。この視点で各地の漆器を観察していった結果、必ずしも遺跡単位で極端な偏差が見られるわけではないが、高級漆器を使用する階層にも、普及タイプの漆器が相当数紛れ込んでいることがわかった。これは庶民層の生活にもかなり浸透していたことを予想させ、事実、中世の集落遺跡の代表である草戸千軒町遺跡からは普及タイプの漆器が大量に見つかっていることが確認できた。鉄鍋に関しては、さらに遺物として残りにくいためまだまだ実態はつかみがたいが、鑄造遺跡に残る鑄型を確認することで、12世紀代から生産量が確実に増えていることが判明した。これらは堺市日置荘遺跡や坂戸市金井遺跡B区、新潟県出雲崎町寺前遺跡など、長期間にわたって操業された鑄造遺跡で大量に見つかっている。いわゆる注文生産品を作る出吹き遺跡と違い、既製品も作っていたと考えられる遺跡で発見されることは、鉄鍋が商品として流通していた実態を示してくれる。こういった鉄器生産を支えたのは、中世を通じて技術革新を遂げた製鉄技術の向上が大きく影響している。中国山地で次々と発見されている中世の製鉄遺跡は、近世から始まるたたら製鉄の前史として近年注目されつつある。時期を確定する材料に乏しいが、今後の調査いかんで、さらに厳密な議論が期待される。

中世の後半に入ると、集落や都市遺跡での遺物量が大幅に増加する。特に陶器においてその現象は顕著である。これは15世紀後半代に瀬戸や越前の陶器窯の量産体制が整うことと連動する。いわゆる「大窯の時代」であるが、実は他の製品についても同様の志向が見られることがわかった。例えば、小田原城下の山角町遺跡・御組長屋遺跡で発見された五輪塔・宝篋印塔、石臼、石鉢などの未成品資料群は、近辺の河原で拾える河原石を加工した粗雑な工程の復元を可能にしてくれた。質を落として量を増やす大量生産のより大きな体制がさまざまな製品生産に及んだ時代を、15世紀というひとつの画期として見出すことができた。

中世の生産技術の蓄積は、海外技術を取り込んで新たな展開も見せる。鉄炮の伝来は、従来の刀鍛冶の技術を基礎に、新たな鉄素材を開発することで、爆発的な生産性を見せた。ヨーロッパ向け輸出漆器である「南蛮漆器」は、タイやベトナムから輸入した安価な漆の代用品であるチチオール、ラッコール成分が主の黒漆を使用していることがわかってきた。それらを運搬した壺が長崎や大阪、京都で見つかっているが、平安京左京三条四坊十町跡からはそういったタイやベトナム産の壺と共に、真鍮生産工房が発見されている。17世紀半ばと考えられているが、陶磁器の組成からもう少し遡る可能性も考えられた。また、西洋型の鍵も17世紀の国内発見例がこの研究会を通じて積み重ねられており、海外からの技術、材料、意匠が中世の技術と融合して「南蛮漆器」として結晶し

た様が見えてきた。

技術は職人の研ぎ澄まされた専門的なものだけでなく、一度に大量に生産する際には人海戦術に応じた技術の一般化も必要となる。中世前半に中国から伝わった石を割る技術は、当初は大型石塔などの特殊なモニュメントの建造に用いられた。これが中世末～近世初頭の石垣に用いる石を割る技術にも使われるようになる。江戸城や大坂城の天下普請では、各地から専門外の人夫が石割り作業に従事させられたため、石の目を正確に見抜く高度な石割り技術を持っていなくても、石を割ることができる手法が編み出されたと考えられる。この視点で石を割るための矢穴痕跡を分析したところ、石割りに有効に機能していない矢穴が無駄に掘られている石をいくつも確認することができた。それにも関わらず石が割れているのは、少ないほど効率がよい矢穴を徹底的に掘ることで、石の割れ方を補正しているためである。労力としては何倍もかかるが、失敗する可能性は低いと思われる。大量の人夫を動員するためのこういった技術の一般化も、また技術史のひとつと呼べよう。

さまざまな視点を持った多くの共同研究員が、同じ問題意識を持って調査、研究に臨んだことで、これまで判明していた事実からも多くの新たな発見があった。これらの成果は、平成25年度企画展示「時代を作った技—中世の生産革命—」（本館 7月2日～9月1日、広島県立歴史博物館 9月13日～11月4日）でも公開した。